

毛利久先生を追悼する文

昭和六十二年九月十日、従四位勲三等、毛利久先生、溘焉として薨す。草露晞きやすく、すでに三載に垂とす。嗚呼、哀しい哉。

先生は昭和五十五年四月、文学部文化財学科の開設にともない、招かれて本学に遷る。文化財学科はその名を他の大学に冠するものなく、けだし今に至るまで、本邦唯一の学科なり。先生温潤和易、謹厚の資をもって輿望を負い、推されて学科の長におる。草創に密に、衆務を執掌し、後進を策励し、晩に尤も経営に尽瘁せられたり。

六十二年二月、学舎を山陵の地に興すや、堂構旧に倍し、学養の規模益々大に、英質の学徒愈集まり、隆泰の氣象、一世に洋溢す。

先生の功、実はその過半にあり。

すでにして易簣の後、藏書を挙げて捐贈の遺旨あり。先生は日本彫刻の史に遼く、城内の正宗、令名海外に加わり、積学の余、藏書の富精、夙くから聞ゆ。今その一切を本学図書館に承け、風範遺響、学内に満つ。

先生の勲績、輝煌、千秋に照耀せり。

ここに耆徳を思慕し、継述の責を新にし、文化財学報第六集を撰して、謹んで先生の靈前に敬ぐ。夫れ冊子は片片として小なりといえども、同室後学の景仰の衷情、ここに鍾まる。在天の靈、尚わくば饗けよ。

昭和六十三年三月三十一日

文化財学科主任 古原宏伸

毛利久先生追悼

深い史料の読みとウエツトな眼

毛利久先生の訃報（ふほう）に接し、専門分野を同じくする学徒として、哀悼の感に堪えない。

いうまでもなく、毛利先生は日本彫刻史研究の重鎮であり、常にその第一線を走り続けられた学究である。昭和十六年に京都大学文学部史学科を卒業になる際、卒業論文として提出されたのは、「飛鳥寧楽時代仏教彫塑の研究」であったと伺っている。以後ひと筋に彫刻史研究の道を歩まれたことになる。

その後、戦時体制のさなかに京都府教育委員会が赤松俊秀先生を中心にして行った京都府寺院重宝調査に参加され、尊像や宝物に接する機会を多くもたれたことも、先生のその後の方向を決定づけるのに役立ったことであろう。その折の大部分な調書のなかで、しばしば先生の筆跡にお眼にかかる機会があった。

戦後間もない昭和二十二年、恩賜京都博物館（国立博物館の前身）に鑑査官として奉職、以後約二十年にわたり、実物に接しながら研究を深められた。昭和二十九年に、ガリ版刷りで自費出版された「快慶の研究」一六〇ページは、まだ専門書の刊行が困難だった当時において、美術史研究者に大きな衝撃を与えた快挙であった。のちに学位論文とされた「仏師快慶論」（吉川弘文館、昭和36年）の母胎をなすとともに、先生のライフ・ワークともいべき快慶研究の一里塚でもあった。温厚で感情をあらわにせず、自慢話などいさいなさらなかった先生の、研究への若い情熱を垣間見る思いがする。

当時東京では、日本彫刻史研究の創設者ともいべき丸尾彰三郎先生を中心に、平安時代在銘彫刻の集大成を行おうという計画がもちあがった。毛利先生は関西からだひととり参画され、その成果は中央公論美術出版から刊行されている。

昭和四十二年神戸大学、昭和五十五年奈良大学と、大学に移られてからの先生は、卒業論文の継続ともいべき飛鳥・白鳳時代の彫刻に関心を向けられ、朝鮮半島や中国との関係に新たな意欲を燃やされた。しばしば韓国の調査にもおもむかれ、

新しい飛鳥・白鳳彫刻観を提示された。

先生は、日本彫刻史の全体の流れをいつも念頭におかれ、全時代に及んで珠玉のような論文を数多く執筆された。史学のご出身ということもあって、史料の読みは深く、また絵をたしなまれた故もあってか、作品を観る眼はウェットで、美術史の論考としては鬼に金棒の感があった。

私が藤原彫刻を研究しはじめたころのご論考「定朝より運慶へ―藤原時代の奈良仏師―」（『美術史』31・昭和33年）は、とくに印象深い好論で、若い私には容易に飛び越えられそうもない高い障壁のように思えたこともはっきりと記憶している。その思いは先生のお人柄への敬慕となっても私になかに生き続けているといっぴよ。

京都国立博物館から奈良大学と、先生の奉職やお住まいに追いつがるような半生を体験しつつあるが、研究の上でもそれを果たしたいと思いつめていた昨今での、早過ぎるご他界である。近年の先生の論攷は、実にわかりやすく、ようやく円熟の境地を迎えられ、執筆を楽しみにしておられた節もうかがえたのに、何とも寂しく、残念の一語につきる。心からご冥福をお祈りしたい。

奈良大学教授 井 上 正

（京都新聞 昭和六十二年九月十八日朝刊 再録）